

今シーズン最後のスキーは糠平源泉郷



山頂ゲレンデから見える糠平湖と東大雪の山々

3月7日（曇りのち雪）

羽田空港8時発の飛行機で帯広空港に向かうため幕張の自宅を5時20分に出た。前回1月中旬に今回と同じ旅行会社ツアーに参加したので、今回のフライトも羽田空港第2ターミナルのADOだと思い、旅行会社から送られてきた資料を確認せずに第2ターミナルに向かった。ところが、受付直前で資料を確認すると、今回はJAL利用のため第1ターミナルであることが判明した。焦った。集合時間の5分前だ。すぐさまモノレール乗り場にも戻りUターンである。いやはやなんとも。利用したのが同じ旅行会社でもきちんと確認しなかった私のミスだった。

第1ターミナルのJAL受付に行くと、「本日の帯広空港は雪のため最悪の場合は羽田に引き返すことを了承して乗って下さい」と念を押される。私は了承したものの天気予報が回復傾向だから大丈夫だろう、と楽観視していた。飛行機はほぼ満席状態だった。途中、機長から帯広空港の気象状況が報告され、除雪された滑走路に無事に着陸できた。天気予報は雪マークから雲マークに変わっていたので、ま・こんなものだろうと思った。

今回のスキーツアー参加者は7人。私は一人参加だが他の6人は同じグループだった。ともに年配者だ。宿泊旅館『糠平館観光ホテル』指定のバス運転手が「昨日は猛吹雪だった。今日はいいね」と人のいい笑顔で話しかけてくる。今日は無風状態で曇り空だ。このまま徐々に天候が回復していくことを願ってバスに乗り込んだ。空港から糠平温泉郷まで1時間半のバスの揺れは、早起きした睡眠不足からか自然にうつらうつらと快い眠りの世界へ誘ってくれた。

ホテルに到着し滞在期間の説明を受けた後、4日間のリフト券を受け取りゲレンデへ出た。私は糠平源泉郷スキー場には1月中旬に来ているのでゲレンデ地図は頭の中にインプットされていた。高速リフ

トを3基乗り継いで山頂へと進んだ。スキーヤーは相変わらず少ない。目につくのは自衛隊北部方面第5旅団の自衛隊員の姿である。彼らは白い毛糸の帽子、白いスキー板、白いストック。だがウェアは迷彩服を着込んで雪上訓練を行なっている。どうせならウェアも白にしたほうが冬戦闘服だろう。ロシアや中国を仮想敵と想定されているのだろうが、今の時代に北海道での真冬の戦闘ってあるのだろうか。

私はスキーを始めて30年は経つだろう。しかしスキースクールに入ったのは安比高原スキーツアーに参加した時の1日講習1回のみであり、残りは全て自己流である。ゲレンデの様々な斜面は滑れるが客観的に見て上手くはない。私にとっての最大の目的はスキーを楽しむことだ。私は30数年間自己流で十分楽しんでいるし、これでいいのだと思うが、リフトに乗りゲレンデを滑って行くスキーヤーを見ていると、下手よりは上手いほうがいいと思うのも現実である。

そこで、今回は次の3点を意識しながら滑った。

- ・身体の正面を常に滑り降りていく下方側に向けていること。
- ・肩をリラックスさせ脇をゆったりすること。
- ・上半身がぶれないこと。

ゆっくり滑ることで上記3点を意識しながら自己学習しているが結構難しいのだ。スキーは感覚なので足裏や身体が覚えていくものだ。

初日の今日は11時半～15時まで、昼食抜き、休憩抜きで楽しくゲレンデで遊んでいた。スキーに限らず身体に技術あるいは技能を覚えさせるというのは、本人の「やろう」という向上心を伴う主体的な実践だけがなせることだと思う。物理学者の武谷三男が著書の中で、技術は自然の客観的法則性の意識的適用だが、技能は自然の客観的法則性の主体的適用である、と述べていたが、まさにその通りだと思う。明日は晴れるといいなあ。



ホテルに戻って売店で本格焼酎『インカの目覚め』720ml瓶を1500円で購入し、風呂上りにビールを飲んだ後、お湯割りで飲んでみた。アルコール度は25度。さっぱりしたしつこくない味でなかなかいける。洒落た黒い化粧箱には次のようなキャッチコピーが書かれていた。

—「北海道幕別産熟成じゃがいもインカのめざめ使用」—
原産地アンデスの栽培種を日本の環境条件でも栽培できるように改良した品種です。(昭和63年<1988>北海道農業試験場で交配に成功し、平成14年<2002>に種苗登録されました。)

収穫後、低温貯蔵庫で約1年間熟成させることにより甘みが増します。「栗」や「さつまいも」に似たぜいたくな風味が特徴です。

夕食時、隣に座った73歳の方は10年来、糠平スキー場に来ているという。私は糠平スキー場には初めて来たことにして色々と情報を聞こうと思っていたところ、給仕の方が、「お客さまは以前来られた方ですよ」と私に言ってきた。私の容姿で覚えていたのか、着ているスポーツウェアで覚えていたのか分からないが、沢山訪れるお客さんのなかから私を覚えていたことに、私は少なからず驚いた。

糠平源泉郷スキー場は帯広空港からバスで2時間弱の山奥の静かな温泉郷である。大浴場の入り口に大正期に源泉が発見されたと表示されている。スキーが好きな年配者にとっては天然温泉が湧き出ている心身ともに寛げるスキー場だと思う。私は来年シーズンもこの温泉スキー場に来ようと思っている。もう、がつつしめないゆったりしたスキー場がいいのだ。

3月8日（曇りのち雪）

朝、目覚めて窓のカーテンを開けると曇ひとつない快晴だった。心の中からラッキーという叫びが聞こえてきた。しかしホテルを出た9時半には空はすっかり曇に覆われていた。天候が安定していない証だ。第1高速リフトに乗っている時に「第3高速リフトの運用を開始しました」というアナウンスが流れた。9時40分だった。これで山頂まで登ることが出来る。

第1高速リフトはフード付きで25柱、第2高速リフトはフードなしで12柱、第3高速リフトはフード付きで23柱、を乗り継いで山頂へ到着する。昨日の雪質と異なり今日はさらさらで締まって良い。昨日、粉雪がずっと舞っていたのが良い結果を出したのだろうか。それとも気温の関係なのだろうか。今日もスキーヤーもボーダーも少ない。少ないことはスキー場にとっては痛手だろうが、利用者にとっては待つこともなくリフトに乗れるので好都合だ。



いると思った。

午前中2時間、午後2時間を目安に滑ることにした。今日も自衛隊第5方面団のゼッケンをつけた自衛隊員が雪上訓練を行っている。雪上訓練といっても鉄砲を担いでいるのではなくスキー訓練である。鬼っ子自衛隊も大変だろうなあと思うが、若い隊員は朝、会った時には「おはようございます」と向こうから挨拶してくる。北海道は求人状況も芳しくなく自衛隊も一つの就職先と聞いたことがあるが、若い隊員は楽しみながら雪上訓練をして

足が大分疲れてきたのでオニオンスープを飲むためにレストラン「アリエスカ」に入った。オニオンスープがメニューとしてあるのは玉葱の大量生産地である北海道だけではないかと思う。実際、オニオンスープを飲むと冷えた身体の底から身体全体に暖かさが蘇ってくるのが分かる。私はコーヒーや紅茶よりも好きだ。

スキーから戻って露天風呂に行くと誰も入っていなかったのでセルフタイマーで写真を撮った。耳を



すませばシジュウカウの仲間が囁いているのだが、小さい姿を探すものの確認出来なかった。粉雪はゆったりと降り続いていた。溪流沿いに混浴風呂がある。入るためには雪で凍った階段を注意深く降りていかねばならない。おかしいのは昨日入っていたのは男ばかりだった。私は1月中旬に来た時に昼間に入ったが、風呂は直径3mほどの円形をしており、脱衣場は男女別だが中に入ると混浴風呂という形だ。混浴風呂と言っても入りたい女性は「女性専用時間帯の夜7時から10時」に入るのだらうと思う。ま・おばさんやおばあさんの裸を見たところでたいしたことではないのだが・・・

明治初期までは混浴は日本人の当たり前文化だった。日本にやってきた西洋人が男女混浴に驚いた記述が沢山残されている。明治政府は西洋文化を取り入れる都合上男女別に分けたのだ。それ以前は男女と一緒に風呂に入るには当たり前のことであり、「混浴」という概念がそもそもなかったのだ。

それから150年、古くからの温泉湯治場に形だけの混浴風呂が残っているのが現状だと思う。

3月9日（曇りのち雪）

今日で3日目。一旦、ゲレンデに出ると休憩なしで滑っているので結構下半身にこたえる。午前中は昨日と同様に9時半にホテルを出た。インフォメーションセンター前に高校生グループが大勢いた。今日は混むのだろうか？ という想像に反してやはり山頂ゲレンデでは人は疎らだった。

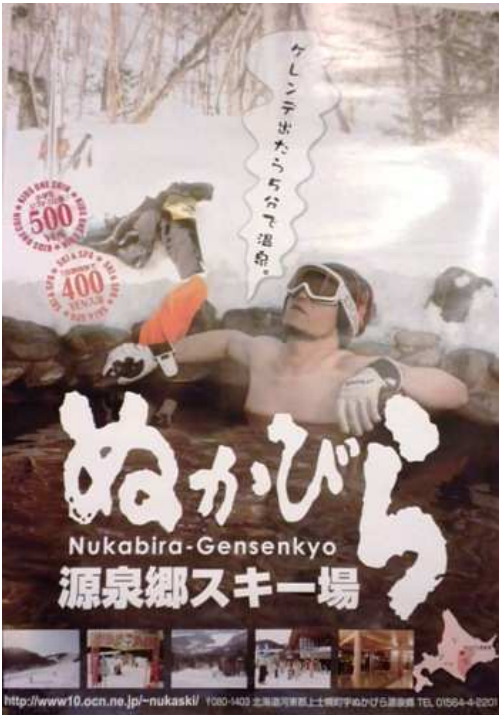
身体の正面を常に下方に向け一直線に落ちていく感覚で左右のステップを切っていくイメージを掴む練習をしているが結構難しい。急速に左右のステップを切る練習は北海道の粉雪だから出来るのだろうが、本州の3月の重いゲレンデでは無理だらうと思う。全て自己流だが自分が納得するイメージで滑ればいいのかぁと思う。それにしても北海道のスキーヤー達は上手い人が多い。

午前中は11時半まで滑り、レストラン『アリエスカ』に入って昨日同様にオニオンスープを頼んだ。一杯300円である。この一杯が冷えきった身体に熱く沁み込み活力源となるのだ。昨日よりも山頂の気温が低下しているのが体感で分かる。滑っている時はあまり感じないがリフトに乗っていると寒さのためスキーブーツを通してジンジンと冷えの痛さが伝わって来るのだ。雪質は初日に比べるとずっとよくなっている。

雪は12時を過ぎても降り続いていた。天候は回復せず太陽は雲の中だ。滑っても身体は冷え込み一向に温まらない。ホテルに引き上げの潮時だらうと判断し13時に帰路についた。ホテルに着いたのは13時半。すぐさま温泉に飛び込んで冷え込んだ身体を温めた。これこそがスキー場と直結したホテル

のありがたいところなのだ。

ホテルで群馬の家族に送るお土産を買った。最初に目についたのは「蝦夷鹿の大和煮」の缶詰めだっ



た。私が以前「トドの缶詰め」などと一緒に食べた時の味は、鯨の大和煮と同じ味だったことを覚えている。味付けが同じだった。缶詰は3個しかなかった。4個買いたいのので担当者に在庫を確認してもらおうと、残っていないとのこと。担当者に教えてもらってホテルから100m離れている酒屋兼お土産屋に同じ缶詰を買いに行った。

酒屋のおじさんは親切だった。「蝦夷鹿の大和煮」の缶詰めを一つ、男山の生原酒を1本買ったあとに、氷下魚の干物が売っていたので自分で食べるのと群馬へ送るのとで5袋レジに持っていくと、525円の値段を4袋は350円、1袋は消費期限が明日までと断りつつ200円に割り引いてくれた。こんなに割り引いて大丈夫なのだろうかと逆に心配してしまった。お土産屋にもあまり人がこず久しぶりの客なのだろう。ホテルから酒屋までの僅か100mの間に店を閉めた2軒のお土産屋と1軒のグランドホテルがあった。こんな山奥まで旅行者がこないのだろう。この温泉地も寂れているなあと考えたが、私はスキー場が営業を続けているならば10年は毎年訪れたいと思っている。

3月10日（曇り）

4日目の朝もどんよりとした天気で明けた。今日も晴れないのだろうか？ 風は吹いていないが山には雪雲がかかっている。このホテルを出発するのは16時の予定だ。10時に清算をした後、嬉しいことに出発まで部屋を使用してもいいとのことだ。普通はチェックアウト後には部屋を明け渡し、個人荷物は大部屋などに集めておくのだけれど利用客が少ないためのサービスなのだろう。スキーから戻って温泉に入れるし酒も部屋で飲める。嬉しいサービスだ。

朝食を終えて部屋に戻ると空に青空が広がっている。いつものように9時半にホテルを出発する。第1高速リフトから右側に真っ白に雪化粧した高い山が見えた。4日目にして初めて見えた東大雪の山々だ。屹立した真っ白な峰は純粋に美しいと思う。

今日は土曜日、リフトが混んでいるのが分かる。一人用の乗車スペースも出来ているし、グレンデの合流点にはオレンジのネットがこれまでよりも多く設置されている。事故防止のためスキー場スタッフは朝早くからリフト運営開始前に全て準備しているのだ。ありがたいことだと感謝する。

山頂グレンデで1時半まで滑った。4日目ともなると足がぐたびれてきているのが分かる。足で雪面を抑えることが出来ない。スキー板がバタバタ踊り、流れてしまうのだ。ま・しかたないことだ。土

曜日のためファミリーが多い。子どもたちが雪と遊んでいるのは実に良い光景だ。



休みなく滑っているので知らず知らずに疲労が蓄積している。今日もレストラン「アリエスカ」でオニオンスープを飲みながら30分休憩したあと、第1高速リフト沿いのルートを滑り降りる。良い感じた。最大斜度24度というチャレンジコースを滑っていなかったで滑ってみた。気持ちよかった。圧雪車が入っているので非常に滑りやすかった。午後1時頃に滑ったのだがシュプールは少なくゲレンデは全く荒れていなかった。

FISとSAJの公認コースで午前中レースが行われていたサーキットコースにも入ってみた。滑りやすい斜面だったが、最後のゴール前が急坂でおまけに日陰になっているのでアイスバーン化していた。でも良いコースだと思った。

ホテルに戻り温泉に入ったあとの湯上りは当然ビール。サッポロクラシックビールを飲んだ。美味しい。続いて旭川原産の「男山の生原酒」の残りを飲んだ。アルコール度数は19度。通常の日本酒よりもアルコール度数は高いが口当たりがよく甘みも多い。実に美味しい酒だ。身体の中にじわ〜とアルコールが沁み込んでいくのを実感する。

フロント集合が15時50分となっているので15時から宅急便で送るスキーセットの荷作りにかかる。前回の志賀高原スキー時からスキー板とバックを別々に送るのではなく、ボーダー用のバッグを購入し、それにスキー板もスキー靴もウェアも一緒に詰め込んで送ることにした。これだと1個の送料だけで済んでしまうのだ。私の使用しているスキー板が通常のよりも短く130cmほどの長さなのでスノーボード用バッグに十分収納できる。この方法だとバック1個分の往復料金3500円ほどがお土産代となる。バックの重さは20kg以内であればOKなので実に良い方法だと思う。

フロントでルームキーを返し宅急便の手続きをしていると、帯広空港まで送ってくれる運転手がやってきて「16時発のお客様は一人だけですから、いつでも出発できますよ」と声をかけてきた。それならば準備は整っていますからすぐに出ましよう、と話はまとまった。一人だけなのでバスではなく乗用車だった。ホテルから帯広空港までの所要時間は1時間30分。1月に来た時に比べて道路に雪はなく、畑の雪も厚さを薄くし所々黒い土が顔を出しているところも見受けられた。季節は3月中旬なのだ。時は巡り、知らず知らずのうちに春は確実に忍び寄ってきているのである。私の今シーズンのスキーは今回の糠平源泉郷スキーを最後に終了する。今シーズンは無職の年金生活者となって初めてだったため例年よりも多いスキー参加となった。これも丈夫で元気な身体があってこそである。